



Title	＜翻訳＞アムワリーの戦線
Author(s)	Sankrityayan, Rahul; 桑島, 昭
Citation	アジア太平洋論叢. 2000, 10, p. 3-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99943
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アムワリーの戦線

ラーフル・サークリットヤーヤン*

桑 島 昭 訳**

アムワリー村は、サーラン県ラグナートプル警察署管内にあり、1935年を除いて、地震の起こった1934年から毎年洪水の餌食となってきた村の一つである。パードーン月(陽暦8-9月)の作物と稲の収穫はまったくない。今年の洪水では多くの家も倒れた。農地を耕せないで、春作の収穫も期待できない。多くの砂糖きびも腐ってしまった。洪水のあと飼料が不足し、地面から新しい雑草が生えて、そのために、近隣の洪水を被った村とおなじように、ここでも家畜の半分が死んだ。人々は飢え、身体を覆う布を求めて叫んでいる。どれだけの者が、やっとのことで春作の種を蒔くことができたろうか。種もみも手に入らない。タカービー(前借り金)も、多くの人は手に入れることができない。それとて、せいぜい5ルピーだ。その5ルピーでどうして種を蒔けるか、どこから牛を買えるのか、どのようにしてマーグ月(陽暦1-2月)、プース月(同12-1月)まで生きていけるのか。

考えても心が縮む思いがする。今日、アムワリーで、5-6日後の夕べにわずかにばかりの穀物を食べることでできる家がどれだけあるだろうか。どれだけの人が自分の家族を親戚に送ることができただろうか。何人かの人たちは、洪水を免れた県内の他の場所に仕事を求めて出かけて行った。以前には飲食に不自由のない名士と考えられていた者も、この災害のために、毎日2セールの労賃を求めて各地をさまよい歩いている。洪水のとき、水からカルミー・カー・サグ(赤花ヨウサ

* (1893~1963), 仏教学者, 歴史家, 文学者, 農民運動指導者

** 大阪外国語大学 地域文化学科アジア・アフリカ講座

イ)を取り出して塩をかけて食べていたが、いまでは、池や水のたまったところで、50-60人の人たちが胸まで水に浸かってこれをちぎっているのを見るのは、普通のことである。洪水のあと、ナルイー(レンドイー)(カヤツリ草科の雑草)の根にある種の球根ができるので、それを掘りだして食べている。砂糖きびのある家の老人は皆、日に2、3度、砂糖きびの汁をすすって生きている。牛は極度に弱って、どれだけの牛が用を足さなくなったことか。こうした人たちを見て、彼らはカルマ(業)と神の名において沈黙し、すべてに耐えることを学んだのかと、私は考える。今日、もしも他の国でこのようなことが起こったとしたら、飢えたる者の集団は宮殿に火を放ったであろう。太鼓腹の人間共のガラスの宮殿を燃やして灰にしたことであろう。耐えがたいことである。人間がこれほどまでに墮落するとは想像もつかない。

5年にも及ぶ洪水に苦しむこのアムワリー村を、パーブー・チャンドレーシュワル・シンのようなザミーンダールが手に入れた。彼の祖父(祖父の兄弟)パーブー・ナンダクマール・シンー彼がこれらすべての資産を獲得したのであるがーにかんして、土地査定副担当官R.C.チャクラヴァルティーは、1918年1月15日付の調査報告書のなかで、「この村は、ナンダクマール・シンの非道に苦しんでいる。彼は、何人かのザミーンダール、いや、多くのザミーンダールを代表して郡税務長官のごとく村を支配している。ナンダクマール・シンを恐れて、この村の農民は彼に反対して行動することができない」と述べている。

チャンドレーシュワル・シン、ボーワー・シン、グフタル・シン、スレーシュワル・シンは、実の兄弟である。そして、ハリシャンカルは、彼らの叔父である。チャンドレーシュワル・シンは、サティヤーグラハの前から、無償で秘密警察の仕事をしてきた。多くの政治裁判で、彼は人々に反対する証言をしてきた。彼のこの無償の奉仕が行政官に影響を及ぼすのは必至である。どれだけの人たちが、彼の推薦で警察に職を得たことか。今日でも、警察と行政にたいする彼の影響力は絶大である。会議派政府が1937年に誕生してから、警察と行政の態度にあまり変化は見られない。このことは、アムワリー村で最近農民にたいして刑法144条⁹⁾が適用されたことから明らかである。

フリダヤナーラーヤン・シン、ディープナーラーヤン・シン、デーウ・ナーラー

ヤン・シンの3人の兄弟のもとには、わずか3ピーガーの小作地があるだけであった。ディーブナーラーヤン・シンの息子ナンダクマール・シンは、抜け目のなさと詐欺行為で財産を増やした。1924年頃、彼が死んだとき、村の2,200ピーガー(約1,500エーカー)の土地のうち、ザミーンダールとして所有する700ピーガーの土地と500ピーガーの小作地が彼にはあった。彼の家では、誰も仕事に出かけたり、商売に出たりはしなかった。土地査定官の上述の発言からも、いかにしてこれだけの財産をナンダクマール・シンが獲得したのか想像することができる。ナンダクマール・シンは、用心深く警察や行政官に賄賂を贈ったり、おべっかを言ったりしていた。村の人たちを互いに争わせて自分の意図を達成するのにたけていた。ナンダクマール・シンは、非協力運動期(1921)にはまだ生きていた。あらゆることをしながらも、ナンダクマール・シンは、裏切り者となって警察を助けたり、スパイの仕事をすることはなかった。この仕事は、彼を継いだチャンドレーシュワル・シンがこの14年間非常に熱心にやってきた。

会議派政府がビハールに成立して以来、ザミーンダールのあいだに動揺が起こった。パカーシュト地^②を耕す者に権利が生まれ、小作地を耕してもアーサーミー権^③が発生することを、彼らは知ることになった。チャンドレーシュワルのような用心深い人間は、このことを良く知っていて、このため、彼は、警戒心から自分の小作地が農民の手に移らないように工夫した。この間、会議派政府の宣伝によって、人々はハリー・ベーガール^④などの不正行為にささやかながらも反対し始めた。アムワリー村では、すべての農民が自分の地主に牛、カーティク月(10-11月)に三つの鋤、さらにアーシャル月(6-7月)に三つの鋤、全部で6本の鋤をベーガールとして無料で提供してきた。この他、何カ月もミルクを受け取りながら、地主はお金を払う必要がないと思っている。農民の家で取れたラウキー、カッドゥー(とくにうり科の食物)や他の野菜も、地主のものとなる。テーリー(油屋)からは、2マウンドもの油粕、そして、あかりを灯すための油しぼり機、後には、5セールの油を無料で手に入れた。

アムワリー村には、以下のジャーティーの人たちが住んでいる(ジャーティーの「伝統的職業」を付け加えた)。

ジャーティー名	伝統的職業	軒数	地主	農民	農業労働者
アワディヤー(クルミー)	農業	75	1	62	12
ラージプート		25	3	22	0
ブラーフマン		25	0	25	0
テーリー	油屋	10	0	8	2
ローハール	鍛冶屋	4	0	3	1
カールドゥー	穀類乾燥	12	0	9	3
カルワール	酒屋	2	0	1	1
ソーナール	宝石商	2	0	1	1
バンワール	木、皮等の商人	1	0	1	0
ドービー	洗濯屋	2	0	1	1
ハジャーム	床屋	10	0	10	1
ムスリム		2	0	2	0
ジュラーハー	織工	6	0	6	0
ドウニヤーン	綿屋	1	0	0	1
コイリー	野菜栽培	8	0	6	2
ドゥサードゥ	養豚	13	0	11	2
チャマール	皮革	13	0	11	2
ノーニヤーン	製塩	4	0	4	0
アヒール	牧畜	7	0	7	0
クムハール	陶工	6	0	6	0
マーリー	庭師	1	0	1	0
ハジャーム(ムスリム)		2	0	2	0
パル	労役提供	4	0	4	0
アティート	修道僧	1	0	1	0
ゴードゥ	部族名	1	0	0	1
サーンイー	ムスリム僧	1	0	1	0
カーヤスター		3	0	3	0
カムカル	水運び	1	0	0	1
計		239	4	207	28

訳者注：ハジャームの家の軒数、および合計の軒数、農民、および農業労働者の数が合っていない。転記の誤りか、原文の誤りかはわからない。

ただ、この村の地主がラージプート、主要な農民がクルミーであることは想像できる。

村の2,000ビーガー中、ザミーンダーリー地と小作地を合わせて1,200ビーガーがバープー・チャンドレーシュワル・シンと彼の家族の手中にある。村の残りの1,000ビーガーの土地の請負人も彼らである。ある意味で、村全体の人たちが、彼らのペーガールと強制の餌食となっている。すべての人が、なんらかの形でペーガールを提供しなければならない。ラージプートとブラーフマンもハリーをせざるをえない。まして、低カーストについては言うまでもない。12軒のカンドウーは、順番に日を決めて地主の家で奉仕・労働のペーガールを提供しなければならない。10軒のハジャームは、地主が病気のときは面倒を見、元気なときは、足をもんだり、うちわを扇いだり、その他の仕事のために奴隷同然である。コーイリーの人たちは、地主の所で野菜が余ったときに、市場に行くことができる。6軒のクムハールは、1年中、地主の家の宴会や結婚式の行列のために無料で食器を提供したり、無料で屋根を葺いたり、瓦を作ったりする。7軒のアヒールは、無料でミルクを出すことを強制される。そして、ギー(バター)を市場価格の2倍の量を出さなくてはならない。家になれば、市場で買って持ってこなくてはならない。こんな状態は、他のジャーティーの人たちについても言える。

このアーシャール月に、いつものように今回も、地主はハリーの提供をせきたてた。3年来、バードーン月の作物と稲の収穫がふるわず、人々は貧しさに苛立っていた。彼らは、会議派の指示に従ってハリーの提供を拒否したかったけれども、そうしなかった。農民は、ただ、ここまでは言った。「しばらく耕すのをお許し下さい。そうしたら、ハリーを提供いたします。」地主といえば、農民のアーサーミー地がたとえ耕されていなくても、まず自分の農地の耕作を望んでいた。この摩擦のなかで、ある者はハリー・ペーガールを出せなかった。そのうちに洪水となり、その必要もなくなった。もはや、地主の側からせきたてられることもなくなった。

カーティク月に農民が春作を蒔くための準備を進めていたとき、再び地主がハリー・ペーガールをせきたて始めた。一方で、人々はこのところ飢饉のために打ちひしがれていた。他方で、彼らが飼っている牛の半分は死んでしまった。もしも、辛うじて残った牛で急いで耕作しなければ、春作は駄目になってしまう。このため、彼らは、ハリーの提供を拒否しなかったが、地主に、「すこしばかり耕すのをお許

し下さい。そうしたら、ハリーをいたします」とお願いした。ラームダニー・マハトーはアーシャル月にハリーをするようきつく言われた。しかし、そのときは、殴り蹴られるということはなかった。カーティク月のある朝、ラームダニーが農地で鋤を使っていたとき、バーブー・チャンドレーシュワル・シンの弟バーブー・ボーラー・シンが来て、ラームダニーにハリー（鋤を使う無償労働）を要求した。ラームダニーは、「旦那、この土地が頼りです。蒔くのをお許し下さい」と言った。すると、バーブー・ボーラー・シンは、悪口を浴びせ、しばらくしてバーブー・グフタール・シンがこの土地の学校長バーブー・ムリグラージ・シンとともにやって来た。ムリグラージ・シンも手に棍棒を持っており、彼もまた、ののしった。バーブー・グフタール・シンがラームダニー・マハトーを棍棒で3回殴った。殴り続けている間に、村の人たちがやって来た。彼らの怒りの表情を見て、バーブー・ボーラー・シンとグフタール・シンはその場を立ち去った。その日、ラームダニー・マハトーは警察署に行って報告した。バーブー・ラームチャンドラ・シン（警察署管内の会議派の書記）も一緒だった。署長は不在で、巡査は賄賂を要求した。しかし、ラームダニー・マハトーに差し出す何があるというのか。

翌日、地主たちは、あちこちから200人の人を集め、農民の土地に植えられていて、彼らが25-30年もの間耕作してきた砂糖きびを刈り取って象に食べさせるか、駄目にしてしまおうとたくらんだ。農民も警戒した。この間に知らせを受けた署長もやって来た。警察を見て、地主の手先どもは散らばってしまった。署長は両者の言い分を聞いた。農民は、「砂糖きびは自分たちのもの。長い間、この農地を耕して来ています」と言った。農民は、その証拠に、仮領収書—ここでは、地主は小作地についても仮領収書を出している—を持って来て見せたがったが、署長は「その必要はない」と言って断った。のちに、署長は、アムワリー村の20人と近くの村の5人（ラームワラト・シン、モーハン・パガト、ラージワンシー・マハトー、パイジュナート・マハトー、ダスリー・マハトー）についてシーワーンにいる郡長官のもとに書類を送った。郡長官は、たった1日を割くだけで、現場に行つて調査することもなく、25人に刑法144条を適用した。もしも署長が誠実に仕事をし、片寄ることがなかったならば、砂糖きびを植えたのは農民であると知つただろう。力づくで争いをおこしたのは、「旦那」の方からであつた。もしも平穏を破つたかどで何かしなければ

ばならないとすれば、144条が農民にだけ適用されるのは何故か、どうして地主側の人間はそのなかに含まれないのか。郡長官はどうして意に介することがないのか。調べてみれば、この村の農民がこの5年間にかにみじめであったかわかったであろう。今日、砂糖きびの汁は多くの人にとって生活の唯一の支えである。もし村に出かけて自分で調べれば、このことを知るのは郡長官にとってむづかしくはなかった。しかし、長い間の政府への奉仕の故に、バーブー・チャンドレーシュワル・シンの警察と行政官への影響力は絶大であり、このために郡長官もひいきする用意ができていたのである。

アムワーリーの農民の状態は明らかである。50年来、彼らは虐げられ、非道に耐えてきたが、いまや、この非道が耐えがなくなった。ことに、この4年間の洪水が彼らを一層動揺させた。バーブー・チャンドレーシュワル・シンと彼の兄弟のところには500ピーガー(472ピーガー)の小作地がある。彼らがこれだけの小作地をいかにして手に入れたかについてはまえに書いた。競売をさせて自分の名前で買ったとしても、その小作地をおなじ元の農民がシクミー耕作⁶⁾をしているのである。その20人の農民に144条が適用された。そのうちの誰も、10年未満の耕作者ではない。今日までは、小作地に小作権が生ずる怖れはなかった。このため、地主は、シクミー耕作の形で農民に土地を貸していた。いまや、新しい法律によって小作権が生ずる怖れがある。そのため、地主は、農地が農民の手に入らないように望んだのである。

問題はこうである。農地を奪われて、これらシクミーダール(シクミー小作人)はいかにして生きていけようか。アムワーリーに生まれながら、この人たちに生きる権利はないのか。これまでこの農地で生活してきた人たちは、飢えてあたら命を捨てなければならないのか。井戸や池に飛び込んで死ぬことを法律が許していないのなら、これまで耕してきた土地をいまも耕し、地主が耕作の準備もしない土地を借りて500ピーガーの小作人になる以外にどんな道があるのか。アムワーリーの農民は、たとえどんなことが起ころうとも、刑法144条が適用されようとも、自分たちが110条⁶⁾によって悪辣な裁判にかけられようとも、はたまた、379条⁷⁾によって盗みの疑いをかけられようとも、自分の農地を手放すまいと決意した。しかしながら、小作料を課して、ほとんどすべての農民に白紙の上に親指の印を押させて、チャ

ンドレーシュワル・バーブーの一家は、告訴すると息巻いている。しかし、たしかなことは、もしも県の役人がまともに行動しなければ、アムワーリー村はチャプラー県のレーオラー⁽⁸⁾になるだろう。地獄の生活をしてきた農民にとって監獄での生活は天国である。

アムワーリーの農民は、シーワーンの郡行政長官とサーラン県の行政長官に公平な扱いを期待してこれまで待ってきた。しかし、二人の長官とも、現場に出かけて誰が農地を占有しているかを調べることなく、チャンドレーシュワル・シンを支持する裁定を下したとき、農民にとって、サティヤーグラハ以外に方法はなくなった。チャンドレーシュワル・シンは、長い間無給で秘密警察に奉仕しており、その影響力は県の役人たちに及んでいる。

我々は、人々に、静かにしているように説得し、そのうちの多数の人たちには、2月24日(1939年)にはアムワーリーに来ないように働きかけた。チャンドレーシュワル・バーブーが多数の暴徒を殴り込みのために召集していることを知ったからである。彼の飼っている2頭の象には数日来たらふく餌を食べさせていた。24日の8時頃、我々は何人かの同志たちとアムワーリーに着いた。警察は2日まえに知らせを受けていた。サティヤーグラハは、朝の10時から始まった。

24日の8時に我々はジージョールからアムワーリーに着いた。そのとき、2頭の象が前にいるのを見た。多数の暴徒が、ときにザミーンダールの名において、ときにラージプートの名において遠くの村から召集されて立っていた。チャンドレーシュワル・シン、ボーラー・シン、彼らのもう二人の兄弟、グフタール・シンとシッデーシュワル・シン、さらに、かれらの叔父が、棍棒を持って配置に就いていた。アムワーリーの農民にとってサティヤーグラハは新しい経験であったので、平静さを保つよう説得することが、きわめて必要であった。こうした考えから、私は1度に10人のグループが農地で刈取りを行うことを決めた。最初のグループは私が指導する。第二のグループの指導者は同志アブドゥル・ジャリール、そして第三のグループがピクシュ(比丘)・ナーガールジュン⁽⁹⁾。我々の逮捕の後は、バーブー・ワースデーウ・ナーラーヤン・シン(もと私設秘書)、そして、バーブー・ジャグラール・チョウドゥリー(大臣)⁽¹⁰⁾が指導者となった。そして、その後の平静さを保つ責任と

活動を続ける指導者としての任務は、同志フセン・マズハル(ビハールの誇る全国的指導者、故マズハルル・ハクの一人息子)にかかった。ちょうど10時に、我々は農地に入っていった。砂糖きび島の畦の上に立つと、ポーラー・シンとハリシャンカル・シンが100人の暴徒と2頭の象にけしかけて、前に進ませているのを見た。ほかの連中にも殴り込みをそそのかしていた。警察は彼らをとめようとなんの手も打たなかった。一人を除いて、すべての警官は遠くのキャンプに配置されていた。警察を指揮するヴィクラマーディトゥヤ警部がひそかに企んで、警察のスパイ、チャンドレーシュワル・シンを助けたがっていたことを、のちに容易に知ることができた。こうした企図から、すべての計画は前以て用意されていた。ヴィクラマーディトゥヤ・シンの内々の助言によって、チャンドレーシュワル・シンが、静けさを破り、殴り込みをかけようとしていたことは疑いもない。農地に入って砂糖きびの刈取りを始め、1～2本切ったところで、警視ジャング・バハードウル・シンが私を逮捕した。この間、ポーラー・シンとハリシャンカル・シンが熱っぽく暴徒に棍棒を振るうようにそそのかした。バーブー・ジャング・バハードウル・シンは数日来病気にかかり、弱っていながらも前進して来る暴徒を止めようとしていた。このため、彼の健康を気遣って私自身心配であった。しかし、これほど大勢の暴徒を三人の人間がどうして防ぐことができたのだろうか。サティヤーグラハに参加している者が少数で、平和的なを見て、暴徒は棍棒を振り上げる気持ちにならなかった。しかし、チャンドレーシュワルの用心棒クルバーンが、ののしりながら我々の方に走って来た。一度はバーブー・ジャング・バハードウル・シンが彼を二歩後退させた。しかし、ほかの方向から別の者が進んでくるのを防ごうとした隙に、クルバーンが私の頭を棍棒で殴った。棍棒は背後から振るわれたので、私にはその瞬間はわからなかった。二度目の棍棒を振るう前に、彼は捕まった。頭に棍棒を食らうのは、初めての経験である。衝撃でぼっとして、頭に手を当てると血が流れていた。農民の土地で刈取りをするのに私の鎌が役立っただけでなく、頭から流れ出た二握みの血の何滴かが農地にたしかに落ちたことを大いに喜んだ。私と10人の同志は逮捕され、キャンプの方に連れていかれた。暴徒と象はそれでも農地につっ立ったままであった。私は、途中、後を継ぐバーブー・ワースデーウ・プラサード・シンやほかの活動家たちに、いきり立つ必要はない、どんなことがあってもサティヤー

グラハを続けるようにと言ひ残した。

我々がキャンプの近くに着いたとき、警官が警棒を持って農地に向かうのを見た。もしも警官が前から農地にいたならば、暴徒が棍棒を振りまわす勇気が起きなかったことは疑いない。数分後、ヴィクラマーディトゥヤ・シン警部は象使いクルバーンを釈放した。チャンドレーシュワル・シンの意向に沿ったのである。

サティヤグラハ参加者の平静な態度を見て、でたらめを言って狩り集められた暴徒は散り散りになり始め、10人一組の四つのグループが順々に砂糖きびの刈取りに出て行った。まだ、四つ目のグループが行かないうちに、後を継いだバーブー・ワースデーウ・シンが逮捕された。144条の通告はすでに出されていたが、その通告では係争地に行くことが禁じられており、彼らも農地に出ていなかった。ヴィクラマーディトゥヤ・シンは、ワースデーウ・シン、同志フセン・マズハル、あるいは、ラグナートプル・ターナー農民組合の議長マハーラージ・パーンデーのうちの誰か一人がそこにいることが人々を平静にするために必要であるとよく心得ていた。それでも、彼は彼らを逮捕してしまった。私は、誰も指導者がいなくてもアムワリーーの農民が平静を保つために全力を尽くし、チャンドレーシュワル・シン、および、内々に企みを練っているヴィクラマーディトゥヤ・シン警部を失望させるのを見て大いに喜んだ。

逮捕された者の数は、52人か53人、内2人は子供、5人は女性であった。午後には、何人かの武装警察も到着した。しかし、その時までには、暴徒の大半は、チャンドレーシュワルの用意したご馳走を食べて家に帰ってしまった。

我々をシーワーンに護送する時間が来て、警部が仲間たちを徒歩で送る考えを明かにしたとき、私は、もしも仲間が徒歩で行くのなら私も徒歩で行くと言った。それを聞いて、警部は、すべての者に乗り物を用意すると言ひ換えた。我々17人の仲間が、武装警察を届ける3台の車に乗って移動し始めると、残りの仲間は徒歩で送られることを知った。途中、我々の車の何人かの者、私もその一人だが、トイレに行きたいと頼んだ。しかし、もしも前方からオートバイで来る若者が車に接触しなから助かるという事故がなければ、どんなに頼み込んでも車はおそらく止まらなかっただろう。警察が生理的要求のような基本的なことにたいしても許可を出したが

らないというのは、私の新しい経験である。

その日の夕方、我々はシーワーン監獄分室に入れられた。そこでは、以前から40人以上の囚人がいて、彼らのためにも十分なスペースがないのに、我々も入れられた。すり切れた毛布も満足な数はなく、このために、何人が寒さに震えたことか。翌日の25日、アムワリーからさらに10人の仲間がやって来たが、夜に徒歩で連れて来られた彼らから、80%の人たちがすでに釈放されていることを知った。監獄の職員の態度は良かった。アムワリーでは、巡回診療の医師が私の傷の手当てをしてくれたが、ここの医師もよく面倒を見てくれた。血が大量に出て、最初の二日間 はめまいがしたが、骨には異常がないことを知った。

私は、会議派政府もまた囚人の食事のために(1日当り)200グラムの小麦粉を現在まで基準にしてきたために、どれほどの囚人が空腹で苦しまなければならなかったかを知って残念に思った。もしも政府が小麦粉200グラムの代わりに350グラムにしなければ、我々は要求のためのハンストをしなければならない。

私は、ビハール州の大臣に言いたい。あなた方が警察を不当に誉め上げて彼らを頭に乘らせたために、その結果、今日我々はこのような苦しみをアムワリーとガヤー綿工場⁽¹⁾で味わうことになるのだと覚えておいて欲しい。あなた方の心から革命の火がまだ消えていないのなら、あなた方もこの警察と対決してもらいたい。

サーラン県、および、ビハール州の民族運動の活動家をお願いしたい。農民にたいして現在行われているこの圧迫を止めさせるため全力をつくすようにと。肉体労働をする農民と労働者はこの闘いの準備ができています。私の知る限り、ビハール州の会議派政府は、ほかのすべての会議派州政府よりも反動的であり、ザミーンダールを支持している。ビハール州の会議派政府のこのような態度に反対していることを、我々は示さなければならぬ。革命は始まった。革命に勝利を。インドの働く者よ、団結せよ。

注

- (1) 凶器を持って非合法の集会に参加することを罰する規定。
- (2) バカーシュト地についての定義としては、以下のものが一般的なものである。
「耕作して所有する土地。期限内に小作料を支払わなかったため、あるいは、支払わなかったと称して小作人を追い立てたのち彼らから「取り戻した」土地。使用人、強制あるいは拘束労働あるいは刈分小作人によって耕作される地主の裁量下の土地。」
The Journal of Peasant Studies, Special Issue on Agrarian Movements in India : Studies on 20th Century Bihar edited by Arvind.N.Das, Vol.9, No.3, April 1982, p. vii.
- (3) 耕作権。
- (4) ハリー＝地主の土地の耕作のために小作人があたえる援助。ペーガール＝政府、のちに、地主のために無償で提供する労働。
- (5) 刈分小作。
- (6) 教唆した者は、たとえ教唆された者が異なる意図で罪を犯したとしても罰せられる。
- (7) 盗みを犯した者を罰する規定。
- (8) 1939年にジャドゥナンダン・シャルマーの指導の下にビハール州ガヤー県レーオラー村で展開された農民運動。シャルマー自身の回顧については、Sho Kuwajima, *Sakshatkar-Bihar ke Kisan Neta Pandit Jadunandan Sharma se Batchit*, Patna, 1996, pp. 29－34.
- (9) Nagarjun (1911-1998), 詩人。ナーガールジュンについての最近の研究としては、Prabhakar Machwe and Suresh Salir (eds.), *Aaj ke Lokpriya Hindi Kavi : Nagarjun-Samagr Krititwa men se chuni hui Kavitaen, Jivan-Parichay tatha Mulyankan*, Dilli, 1999. この本には1939年に発表された詩も収められている。
- (10) Jaglal Chaudhary (1895－1975)、1937年に成立した会議派政府の健康・福祉相、カーストの差別を体験しながらも、「カーストの指導者」と呼ばれることを望まず、「ささやかな社会活動家」を自認していた (Sachchidananda, *The Harijan Elite-A Study of their Status, Networks, Mobility and Role in Social Transformation*, Faridabad, 1977, pp. 201-3)。
- (11) ガヤー綿工場のストライキ。

「追記」 訳出にあたり、アシュワニー・クマール・シュリーヴァースタヴァ教授、および、古賀勝郎教授にご教示いただきましたことを感謝します。

Peasant Satyagraha in Amwari

Rahul Sankrityayan

translated by :

Sho Kuwajima

The original article appeared in the journal published in Ilahabad, *Itihas-bodh - Itihas Nirman ke lie* (History Consciousness - for Making of History) ,No. 13, April-June 1993, pp. 67—73 under the title of "Amwari ka Morcha".

Judging from the contents of this article, we can imagine that it was most probably written in jail before Rahul started his hunger strike. This is not only a vivid description of the Amwari satyagraha by its leader, but also an appeal to the Congress ministry which had been working since 1937. Already we know what happened in the Amwari Satyagraha in Rahul's *Meri Jivan-Yatra*, Bhag 2, Ilahabad, 1950, pp. 511~3, but here the historical background of the satyagraha, social structure, particularly caste-wise composition of the village Amwari, and the process of preparation for both the peasant satyagraha and counter violence on the side of zamindars are described in detail.

Amwari is a village where the Kurmis, 'middle caste', are dominant peasants, while the zamindars are Rajputs. Rahul writes in his autobiography that the zamindar was persuading his men, saying that the Kurmis were spoiling the *ijjat* (dignity) of the Rajputs and therefore the men must respond to the caste outcry for help.⁽¹⁾ Unlike in the 1980s and after in Bihar, here in Amwari the zamindars tried to wage '*ijjat ki larai*' (struggle for dignity), but were unsuccessful. Problems that peasants faced were too obvious to be camouflaged.

Also it is noteworthy that Muslim activists joined the peasant movement led by Rahul. Abdul Jaleel and Husain Mazhar worked together with Nagarjun and Jaglal Chaudhary.

Rahul recollects that, thinking that Hindus might feel it difficult to prepare meals for Muslims in their houses, Rahul used Hindu name, Pratap Singh for Jaleel. He adds, however, that in jail Rahul, Jaleel and peasants were taking meals together. There was no need of lecture for this purpose.⁽²⁾

How the peasant movement in Bihar of the 1930s was affected by caste or communal factors, or how it explored new sphere in social life should be traced carefully along with the meaning of women's participation in the movement. Rahul writes in this article that five women were arrested in Amwari. During the satyagraha days, when volunteer workers went to market, women who were selling vegetables helped them.⁽³⁾ The 'victory' of the satyagraha in Reora is inconceivable without the role of the women in it, though, as Swami Sahajanand recollects, even after its truce Reora faced many serious problems.⁽⁴⁾

Rahul Sankrityayan, an internationally well-known scholar and peasant leader in the satyagraha, was hit in the head by the *lathi* of Kurwan, an elephant driver employed by the zamindar. In this article the scene is described in detail with Rahul's perception at that moment. Prof. Manoranjan wrote his moving poem under the title, "Rahul ka Khun pukar raha" (Call from Rahul's Blood).⁽⁵⁾

This accident occurred under the Congress Ministry, and this paved the way to his participation in the inaugural meeting of the Communist Party in Bihar in October 1939⁽⁶⁾. By the way, Rahul did not wish that Kurwan was to be punished. He thought that Kurwan was forced to use his *lathi* under the order of the zamindar. He went to the court on 29 August 1939 when the trial was held, and submitted his petition asking Kurwan's release.⁽⁷⁾ Kurwan was acquitted.

Nagarjun, a poet, also participated in the satyagraha as Rahul's fellow worker. His literary life was influenced by this experience in the satyagraha. Jaglal Chaudhary, a Congress Minister, joined the satyagraha as one of its leaders. This shows that leaders of various trends in both political and other fields participated in the satyagraha.

Rahul's description tries to be fair even to those people who live in the police and jail system. Simultaneously, he is observing carefully how the oppressive police administration

survives under the patronage of the zamindars and despite the formation of the 'popular' government. Also Rahul sees peasants under the shadow of the 'Karma', but finds new future in the satyagraha itself.

I would like to express my grateful thanks to Prof. Lal Bahadur Varma for kindly permitting the translation of Rahul's article into Japanese from the *Itihas-Bodh*. Also, I have to express my special thanks to Mr. Jitendra Rathore, a poet who knows Nagarjun well, and Prof. Surendra Gopal for kind information.

Footnote ;

- (1) Rahul Sankrityayan, *Meri Jivan-Yatra*, Bhag 2, p.512. Also, cf., Kaushar Kishore Sharma, *Agrarian Movements and Congress Politics in Bihar*, Delhi, 1989, p. 151.
- (2) Rahul, op.cit., p. 528.
- (3) Ibid., p.514.
- (4) Swami Sahajanand Saraswati, *Mera Jivan Sangharsh*, Bihta, 1952, p.526.
- (5) Trivedi Sharma 'Sudhakar', *Mahan Jivan Laghu Parichaya* (6) *Mahapandit Rahul Sankrityayan*, Gaya, n. d., p.14. Also see, Indradip Singh, "Rahulji: Sansmaran", in *Rahul Smriti*, Nai Dilli, 1988, p.378.
- (6) Rahul, op.cit., p.538.
- (7) Ibid., p.535.